# 伊藤整全集

第二十二巻

# 伊藤整全集

22

新潮社版

編纂
瀬沼茂樹
平野　謙
小田切　進
奥野健男


伊藤整全集
—22—


© Sadako Itō 1973. Printed in Japan.



女性に関する十二章　他

定価二〇〇〇円

昭和四十八年二月十日　印刷
昭和四十八年二月十五日　発行

著者　伊藤整
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一電話東京二六〇—一一一一郵便番号一六二振替東京八〇八
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社大進堂



乱丁，落丁本はお取替えいたします。

# 伊藤整全集 第22巻 目次

# 女性に関する十二章


第一章　結婚と幸福　一〇
第二章　女性の姿形　一八
第三章　哀れなる男性　二六
第四章　妻は世間の代表者　三三
第五章　五十歩と百歩　四一
第六章　愛とは何か　四九
第七章　正義と愛情　五七
第八章　苦悩について　六五
第九章　情緒について　七三
第十章　生命の意識　八〇
第十一章　家庭とは何か　八八


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

第十二章　この世は生きるに値するか　九五
結びの言葉　一〇三

ヨーロッパの旅とアメリカの生活

序　文　一一〇

第一部　ヨーロッパの旅

一　パリのペンクラブ理事会　一一三
二　A・A作家会議とソ聯の旅　一一七
三　再びパリへ　一八〇
四　ロンドン　二三〇
五　ジョイスの街　二四六
六　ロレンスの郷里　二五三

七　ミュンヘンからウインへ　二六八
八　イタリアの旅　二七八
九　マルセイユ　三一一
十　地中海　三二〇
十一　紅海　三五九
十二　インド洋　三七六
十三　シンガポールからマニラへ　三九八
十四　マニラから横浜へ　四四七
第二部　アメリカの生活
一　ニューヨーク到着　四六四
二　ニューヨークの小学校　四六九
三　ニューヨークの学者生活　四七二
四　パーティーその他　四七七

五　アメリカの日本文学研究　四八一
六　西洋女気質　四八五
七　アメリカのなかの日本　四八九
あとがき　四九七
編集後記　瀬沼茂樹　四九九

# 伊藤整全集　第22巻（随筆）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 女性に関する十二章

# 第一章　結婚と幸福

私がこの文章を書こうとしている雑誌は、日本の婦人雑誌のうちで、もっとも高級だと認められている『婦人公論』です。つまり、私は、多分日本の一番智慧のある女性読者たちに対して、女性についてのお話、または講義、またはお説教を述べようというのです。本当を言うと、これは怖ろしい事であり、またアジケナイことです。私は目下のところは、美しくはあるが年齢は中年に達した一女性の夫であり、未婚の女性（一歳と五歳）の父親であり、かつ同時に年老いた一女性の息子でもありますから、女性を知らないとは申せません。しかし、女子高等学校の校長先生や女子大学の学長のように、美しい恋愛や理想的な結婚についての訓示を与える資格や、前記の各項において自信のある生活や思想を持っているわけではありません。

しかし本誌の執筆陣に名を並べている諸先生を見わたしたところ、清水幾太郎先生のように、ほぼ理想の夫、理想の父親、理想の教師としての資格を完備しているような方もありますが、必ずしもそういう人ばかりではない。たとえば某々先生よりはオレの方が身モチが確かだ、と私がひそかに考えるような先生も、一人ならず本誌の名誉ある執筆者になっていられます。

またさらに考えれば、私は他の諸先生にないところの資格をも持っています。すなわち私は、さき頃ワイセツ文書販売罪で起訴されて第一審の裁判では無罪となりましたが、この雑誌が発売されている頃は第二審すなわち高等裁判所の判決が下って、改めて有罪か無罪かになるというような、被告人、被疑者であります。私がその事件で翻訳して販売したところの文書は、イギリス人の故D・H・ローレンスという人が書いた『チャタレー夫人の恋人』という著名な小説です。その小説は、恋愛の中の一行動である男性と女性の性の交わりに思想的な意味を見出したことで問題になったものです。その訳者で、その刑事事件の被告人である私は、女性に対して教える学識や思想を多く持っているだろう、と本誌の編輯者が考えたことは、無理のないことです。

その上、私は、友人の三好達治という、当代一流の詩人の判断するところでは、大変早熟の詩人であったとのことですが、二十歳にして、数十篇の恋愛詩を含む詩集を刊行しました。その後は、小説家と文芸評論家とを兼業し、さ

らに幾つかの学校で教師をしました。恋愛詩人で、小説家で、文芸評論家で、教師で、しかもワイセツ文書販売罪の被告人である。なるほどこれでは女性に教えさとす意見を多く持った人間であると判断されても致し方ないでしょう。

そのような女性問題について見識を持った筈の私を、最近びっくりさせた新聞記事があります。『東京新聞』の「放射線」という欄に昭和二十七年十一月二十三日、佐渡勇という人が書いた文章です。それは、二つの怖るべき組合が成立したことを報じたものです。一つは「全国失業者組合」というもので、電気会社や石炭会社の賃金値上げのストライキに反対し、「彼等の賃金は我々の犠牲のタマモノだ。彼等は特権階級であるばかりでなく、ストで中小企業を圧迫して、間接に我々の就業を妨害している。彼等は鎖以外、失うべき何物もないと叫ぶが、我々は生命以外に失うべき何ものもない」。だから、この全国失業者組合は「電産等の組合がストによって獲得した賃金の三分の一を割前として我々に提供することを要求する」のであり、その要求に応じない時は「我々のうちには技術者も含まれているから、我々は「勇敢にスト破りを開始する」というのです。

これだけでも相当に驚いたのですが、その次には、「全国婦人未婚者組合」というのが成立したというのです。その組合設立の発想法は前記の失業者組合と同じ型、すなわち独身を失業状態と考えることにあるようです。その組合は、「未婚者のために家庭に代るべきクラブ等の施設を要求して結成された」ものであって、三十五歳以上の未婚女性を組合員とするが、「未亡人も加入を許される」のだそうです。この組合が前記の失業者組合と似ているところは、このクラブの建設費及び維持費を得るために「既婚婦人から『結婚税』を徴収することを要求している」ということです。さらに怖るべきことは、この組合は、この要求が「期限内に」実現されない場合には、「既婚男子との恋愛を積極的に行うことによって、彼等を（すなわち私のような既婚の善良な夫を、私の奥さんから）奪取するかも知れぬし、既婚婦人が自己の特権を守るために振りまわす所の性道徳は、これを徹底的に粉砕しなければならぬ」という宣言を発表したのだそうです。これは、日本女性史上の未曾有の大事件であって、かの高群逸枝さんの『日本女性史』の末尾に特筆大書して頂かねばならぬものであります。

これを読んだとき、私はギョッとして、この新聞記事を切り抜いて、それを私の妻すなわち伊藤夫人の目の届かぬ所、すなわちスクラップブックの真中辺へ貼りつけてしまいました。これは容易ならぬことになったものだ。これから後は、私は電車に乗っても、喫茶店へ入っても、とにか

く三十五歳以上であって、同時に独身であるらしい女性がいたら、その近くに坐らないことにしよう。またその種の婦人が腹痛を起こしていたり、下駄の緒を切って当惑しているような場面にぶつかっても、それは彼女が私を誘惑しようとする戦術であるかも知れないから、彼女を助け起こしたり、親切な言葉をかけてやったりしないように、特に注意して生活しよう、と考えたのであります。

そして、もし私の奥さんの所に結婚税がかかって来たら、他のどのような税金の支払いを延期しても、その税金だけは、私が特に税務署に行って払い、彼女等のクラブを作ることに出来るだけ助力してやろう、と覚悟をしました。私のような、四十歳台の、魅力に富んだ容貌を持った紳士で、その上美しい詩やロマンチックな小説の類を述作したり、ワイセツ文書を販売したと疑われたりする男性は、多分三十五歳以上の独身の女性から見れば、「積極的に恋愛を行って奪取す」るには、もっとも手頃な獲物であるにちがいない、と私は推定したのです。

このような魅力的な条件を持った男性なる私が、女性に説教するとか女性を教え導くなどということをしたならば、その結果は、私の方でも女性の方でも、益よりも害の方が大きかった、という結果が生まれることを私は危惧します。この佐渡勇氏の記事を読んで、私の勇気はいちじるしくくじけました。しかし、私は、これまでも税金を払うには大変苦労して来たのですから、この上私の奥さんに、彼女が幸福であることの代償としての結婚税がかかって来たら、一層その支払いに困難することは目に見えています。それなのに、折角この雑誌の編輯人から注文のあった原稿を書かないで原稿料をフイにするというのは、これは思慮深い旦那さまのなすべきことではありません。

さて、私はかの清水幾太郎先生の筆法にならって、このような深刻な問題の起原と解決法について、社会学的な判断を下そうと思います。窮したものは手段を選ばない、という格言があったと思いますが、もし不幸にして今までそれがなかったならば、今私がそれを作りました。さらに、財産はすべて盗めるものである、という近代社会主義または共産主義の根本認識があります。この三十五歳以上の未婚女性の組合は、この二つの認識を結び合わせて、次のように置きかえたのであります。ある女性の所有する男性はすべて隣人の女性から盗めるものである。それを奪い取るのは、生きる者の権利である。すなわち男性は、女性に愛の満足と金銭の満足とを与えるところの財産すなわち物体である、ということになります。そして彼女等のこの認識は、さらにその外延において、次のような認識と連絡があ

ります。第一、結婚は幸福である。第二、三十五歳以上の女性は、他の女性からその夫を奪おうと決心すれば奪うことが可能なほど魅力的なものである。

私は、個人的経験としては結婚が幸福なものであることをここに断言するものでありますが、私の同業の先輩である文学者にして同時に大学の教員であった著名な二人の男性は、結婚は幸福なものにあらず、という思想を疑いもなく持っていました。一人は夏目漱石君であり、もう一人は私と同様ワイセツ文書販売の被疑者となった経験をも持っているところの永井荷風君であります。夏目君の考えは次のようなものでありました。近代の男性は自分を無にして女性を愛するにはあまりにも強くエゴを主張するようになった。また近代の女性は、己れを無にして夫を愛するには、あまりにも強くエゴを主張するようになった。従って、近代の男性と近代の女性は、絶えざる自己犠牲を必要とする結婚生活を円満に営むことはできないのである。このように言って、夏目君は、近代人の結婚は否定しましたけれども、近代人の恋愛は否定しなかったのであります。ですから彼の意見を、明治風でなく、第二次大戦後風に私が説明すると、次のようになります。近代の男性と女性は、その愛の交渉を結婚生活という形をとらずに行うことが妥当なのである。夏目君は、小宮豊隆とか内田百閒とか安倍能成という「すぐれた」弟子たちを持っていたというのが定評でありますが、その中の誰一人として、この彼の真の思想を理解し、祖述したものはありません。気の毒なことです。本当は夏目君は未婚者であることは不幸なことでなく、幸福な羨ましい身分だと考えていたのであります。

さて永井荷風君は若年の頃に、今の名舞踊家藤蔭静枝女史と恋愛をした結果、結婚生活をしたのでありますが、永井君が、小説家としての材料探索の生活を、結婚生活と合せ営むということに対して、藤蔭女史は強硬に反対したように文学史的には推定されるのであります。その結果結婚生活の方は合意の上解消されてしまい、その後この両人は長年の独身生活に入りました。そして荷風君は小説材料探索生活に専心した結果、近代の大作家としての業績を成しとげたのでありました。また藤蔭女史は当代の代表的な名舞踊家となりました。家庭に縛られて、踊りもせず、小説も書かなかったならば、この二人が大芸術家となることは不可能であったでありましょう。永井君の小説や翻訳等の業績に対して文部省は最近文化勲章と年金を贈ったのでありますが、それについて永井君は次のように述べました。「私が文化勲章をもらった原因は多分『断腸亭日乗』四巻を残したことによるのだろう」。その意味を私が解釈すると次のようになります。腸を断つような辛い思いで、長年

ひとりで自炊生活をしながらも、その独身を貫くという志を曲げずに、その間の放蕩と述作の生活記録を残したことは、国家が文化勲章を与えてケンショウするに値する大きな文化的業績である。簡単に言えば、独身生活は文化業績である。

このような優秀な二人の文化人が、結婚に反対の意志表示をし、独身を幸福や文化業績と同じものであると考えているのに、なぜ三十五歳以上の未婚女性の組合員諸氏は、独身を不幸と考え、結婚を幸福と同一物だと考えるのでしょう。私がもっとも不思議と思うのは、その点であります。多分彼女等は、まだ一度も結婚をしたことがないから、結婚というものは、よほど立派な、この世の楽園のようなものだと考えているのでしょう。すべてまだ自分の味わったことのない果実は美味であるにきまっていると人間は考えがちなものです。彼女等が結婚をして見て、それが、予定しかつ希望したほど楽しいものでもなく、幸福なものでもないと分った時、多分彼女はその次に、まだ私は一度も死んだことがないから、死ねばきっと幸福になり、天国に入れると考えるようになるでしょう。現に結婚した女性の中には、そのような考えを抱くに至った女性が、現実に、一人ならずあるのです。

人間が結婚しないでいる状態を、就職しないでいる状態と同じものだと考える考え方には、かなりの疑問があります。たとえば私のように、奥さんの結婚税のことまで予定して原稿を書くというような稼ぎのよい旦那様にアリツイタ婦人が幸福であることは、これは疑いのないところでありますが、そういう旦那様が男性の全部ではありません。私としても本心は、奥様が女代議士か女医のようなカセギのある女性で、私がフトコロ手をして、金にならない詩を書いて暮らす方が望ましいと思っています。まして三十五歳まで幸福にも結婚もせず死にもせずに生活して来た女性は、それぞれ立派な生活手段を持っているにちがいありません。そんな有利な女性と結婚したら、私だって働きはしません。働く女性は煙草ぐらいは吸うでしょうが、働きのない男性はきまって大酒飲みのものです。すなわち、その女性はこれまでその収入によって一人で生活して来たのを、結婚することによって、その半分以上は確実に旦那さまに取り上げられるものと思わねばなりません。バカバカしい話です。すなわち、原則的に言いますと、三十五歳以上の女性は結婚することによって半失業の状態におちいるのです。結婚と就職とは、この場合、実質上逆のものであることを、「全国未婚者組合」の組合員はよく認識しなければなりません。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com